様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６６０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３５２

研究課題名（和文）英語圏カリブ・アフリカ文学の監獄と移動（不）可能性

研究課題名（英文）Prison and the (Im-)possibility of mobility in the Anglophone Caribbean and African Literature

研究代表者
吉田　裕（Yoshida, Yutaka）

東京理科大学・工学部教養・講師

研究者番号：２０７３４９５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：監獄と植民地統治の関係性について、とりわけ英語圏カリブ文学を対象として、検討した。結果から言うと、当初の目標の一部である、アフリカ文学と監獄の関連性については十分に調査、執筆予定を達成することはできなかった。ただし、予定としていた英語圏カリブ文学に関しては一定の成果をおさめることができた。とりわけ、C.L.R.Jamesのメルヴィル論を基軸とした監獄文学論は、論文として形にするところまではもっていくことができた。さらに、ここから派生した問題系として、冷戦期の比較文学論として、米軍占領下の東アジア（朝鮮戦争と沖縄）と英語圏カリブ文学を比較するという視座が生まれたことは予想せぬ成果であった。

研究成果の概要（英文）：I examined the relation between prison and colonial governance in Anglophone Caribbean literature. As a consequence, I could not complete my initial plan of research and writing, especially of the relation between African Literature and prison. But I could publish some articles related to Anglophone Caribbean Literature. Especially, I could somehow produce a draft on prison literature that focused on C.L.R. James's book on Herman Melville. Furthermore, there was an unexpected consequence from this project: a perspective on comparative literature in the Cold War era, which contrasts East Asian literature (especially of the Korean War and Okinawa) with Anglophone Caribbean Literature of the 1950s, making the U.S. military occupation a common ground.

研究分野：英語圏文学、カリブ文学および思想

キーワード：監獄　カリブ文学　群衆　人種化　冷戦　脱植民地化と統治　米軍占領　文化

１．研究開始当初の背景

博士論文では、植民地主義的な言説が大衆や民衆、群衆などの集合体を、いかに表象してきたかについて、あるいは、反植民地的な言説がそれらをいかに書き換えてきたかについて、英語圏文学（イギリス、アメリカ、カリブ、アフリカを中心に）を題材として論じた。本研究は、この論文の最後の二章で論じたケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴの経験を出発点としている。

すなわち、植民地において知識人が植民地権力に抵抗する際、民衆や大衆という集合体を立ち上げ、みずからの拠り所とするだけでなく、反植民地的な言説が生成する際に、監獄という場が重要な空間として機能しているのではないか、という仮説である。監獄がヨーロッパの植民地権力にとって自国の労働者の規律訓練を図る不可視の空間として機能したことは、ミシェル・フーコーを始めとする論者によって指摘されてきた。また、アンジェラ・デイヴィスは、合衆国において、監獄こそが奴隷制の実質的な温存と資本主義の共犯性を担保する場であることを喝破してきた。これらの論者の中心的な論点とはなっていないが、植民地主義と監獄の関連性はさらに注目されてよいといえる。

監獄は、植民地において暴力が行使され、人びとの自律的な運動を規制し弾圧するとともに、植民地が独立した後も民衆的運動を抑えこむ場として機能してきた。ただし、それだけではない。70 年代後半から 80 年代初頭にかけて収監されていた際には、グギは、韓国の詩人金芝河から学び、新植民地主義的な経済的搾取と自律的な政治運動の弾圧に対して、人びとの声を媒介する風刺としての文学を作り出してきた。以上を考えると、監獄は、より水平的で、真に国際的な関係性を想像し、民衆へと語りかける言葉を発明する場としても機能してきたのではないか。

２．研究の目的

以上の背景を元に、本研究では、前出のグギ、ブレイテン・ブレイテンバッハら南アの作家や詩人、またＣ・Ｌ・Ｒ・ジェームズやジョージ・ラミングをはじめとするカリブ海地域の知識人や作家ら、1950 年代の冷戦初期から 1970 年代から 80 年代の冷戦後期にかけての、アフリカ・カリブの監獄文学を対象とする。そして、これらの書き手が、監獄から／監獄をめぐって描いた大衆・民衆・群衆像を批判的に検討することを目指した。

また、監獄の特徴としては、身体の自由な移動が禁止されているということが挙げられる。よって、身体の移動の可能性あるいは不可能性と、これら脱植民地期の監獄をめぐる文学が、どのように連関するのかということも主要な検討対象となる。ポストコロニアル研究においては、移動しうる主体こそが言祝がれるあるいは、検討対象になる傾向にあったが、移動しえない主体が他の主体群の可動性や移動不可能性といかに接合しうるかを思考する場として監獄文学を考察することを目指した。

３．研究の方法

最初の 2 年は資料収集に力を注ぐことを目指した。関連する文学書、研究書を揃えるだけでなく、まずは、Ｃ・Ｌ・Ｒ・ジェームズについての論文を書くことを目指し、関連する資料収集を試みた。彼がニューヨークのエリス島に収監されていた時の関連文書がニューヨークのコロンビア大学付属図書館および、ニューヨーク市立ショーンバーグ図書館に集められていたので、それらのうちから重要なものを複写するなどして、研究に役立てるよう試みた。

また、グギと金芝河の関連に見られるように、バンドン会議以降の、アフリカ・カリブの文学と東アジアの文学の水平的なつながりについても、関連して文献を集めるなどした。

また、2 年目の半ばからは、国際会議等で成果を発表するよう心がけた。ニューヨーク州イサカのコーネル大学、台湾国立大学、トロント大学などでシンポジウムに参加し、有益な意見交換をすることができた。

各年度の具体的な研究方法は以下である。

2015 年度：

本年度は、本課題そのものを支える問題意識をより明確にできた。とりわけ、脱植民地期における民衆や大衆という集合性がいかにして表象＝代行されてきたのかという問いが、監獄と移動という問題系により深く関わっていることを認識できた。この問いは、2015 年 10 月に日本英文学会関東支部のシンポジウムにて提起した。

重要だったのは、監獄と移動そして、民衆や大衆についての表象には、移動の制限が重要であるということに気づいたことだった。特に、1951 年のマッカラン法により、カリブ海地域の労働者及び作家らの多くが、合衆国でなく、英国への移住を選んだ。他方で、法の施行以後、合衆国内の黒人知識人の海外への移動が制限された。さらに言えば、この法を始めとする移動の制限は、環太平洋的な冷戦体制とも関わる。朝鮮戦争と沖縄の軍事化強化を経て、ベトナム戦争に至るまでの米軍支配網の強化・再編成の一部として捉えることもできる。別様に言えば、軍事ネットワークという回路を通じて、逆説的に、それまでは無かった類の「出会い」を可能とした

2016 年度：

主に資料調査行なった。ニューヨーク市のコロンビア大附属図書館及びニューヨーク市のショーンバーグ・センターにて、Ｃ・Ｌ・Ｒ・ジェームズに関する資料の一部を収集してきた。ただ、コロンビア大附属図書館のＣ・

L・R・ジェームズ関連のアーカイヴは膨大なため、その一部を見ることができたにすぎなかった。それでも、メルヴィル論を執筆していた時期の前後、エリス島での収監時期に書いた手紙やFBIによるジェームズの追跡および調査についての資料の複写など、重要な資料を手に入れることができた。また、国際学会にてC・L・R・ジェームズのメルヴィル論についての発表を行うことができた(2016年7月、ニューヨーク州イサカのコーネル大学)。これまで執筆を進めてきたC・L・R・ジェームズのメルヴィル論と、やはり別の形で研究を進めてきた沖縄の歌人である新城貞夫の仕事を、これまでは別個のものとして論じられがちであった太平洋および大西洋の脱植民地化のプロセスにおける冷戦化と軍事化が、文学を介して批判的に連繋するあり方として比較した。また、同じく7月に東京外国語大学にて研究発表を行った。1956年パリにて開催された第一回黒人作家芸術家会議を題材とし、英語圏知識人（リチャード・ライトとジョージ・ラミング、ジェームズ・ボールドウィン）をめぐる軋轢について論じた。

2017年度

当該年度は、前年度に収集した資料をもとに関連論文執筆に集中することを目指した。10月には台湾国立大学のシンポジウムにて発表、2018年2月にはカナダのトロント大学比較文学科年次大会にて発表を行った。いずれも、1950年代初頭の朝鮮戦争や米軍占領期の沖縄が、同時代のカリブ文学（C・L・R・ジェームズやサミュエル・セルヴォン）にいかに描かれてきたかを論じることで、環太平洋および環大西洋における、米軍統治と人種化の様相の連続性を論じた。また、2017年末から2018年初頭にかけて、関連する論文の投稿を二、三度行った。一部の結果は未定だが、掲載が決定しているものもある。また、トロント大学での報告は、今後の研究にとって重要な知己を得ることができたという点で非常に有益であった。

４．研究成果

結果から述べると、当初予定していた様な規模での成果を得ることはできなかった。南アの作家ら、そしてグギの監獄記について論じるにはもう少し長いスパンで研究計画を立てるべきであった。ただし、カリブ文学に関しては、一定程度以上の成果を収めることができた。掲載予定のものも含めれば、4点の論文を出版することができた。また、関連する業績として、以下のリストには記していないが、ジョージ・ラミングの最初の小説作品である『私の肌の砦のなかで』の全訳を出版する予定である。

また、予期せぬ成果として、監獄文学を論じる過程から、さらなる研究への展望を得ることができた。すなわち、C・L・R・ジェームズの監獄文学とも言うべきハーマン・メルヴィル論の『船乗り、背信者、難破者』を軸として論文を執筆するなかで見えてきたのは、1) 1951年のマッカラン法を起点として合衆国の国境をめぐる移動の自由の制限と移民をめぐる状況、2) 中国での革命の成功、朝鮮戦争以降の南北の国境の固定、そして沖縄での米軍基地の拡大など東アジアでの冷戦と軍事化、すなわち、帝国日本から合衆国への占領統治の継続、そして、3)トリニダードやガイアナをはじめとするカリブ海地域において、イギリスからアメリカへ帝国間による植民地統治の継続としての新たな軍事基地の設置を介して「反米」とみなされる勢力を弾圧してきたこと、以上3点が相互に連関し合っているという事実である。

反省としては、統治と人種化の空間・装置としての監獄についての考察を、理論的かつ歴史的な位置付けとして、フーコーやアンジェラ・デイヴィスらが論じている以上に、よりニュアンスに富んだものとして提示できたらなお良かった。これは今後の課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

1.吉田裕「人種と文化をめぐる冷戦　第一回黒人作家芸術家会議のリチャード・ライトとジョージ・ラミングを中心に」『年報カルチュラル・スタディーズ』第6号, 2018年, ページ未定.（査読有）

2.吉田裕「群衆、あるいは脱植民地化の不確かな形象　ジョージ・ラミング『成熟と無垢について』論」『多様体』1号, 2018年, 157-177頁.（査読無）

3.吉田裕「中野好夫と沖縄　「道義的責任」と主体化の論理」『年報カルチュラル・スタディーズ』第4号, 2016年, 245-262頁.（査読有）

〔学会発表〕（計　6　件）

1.Yutaka Yoshida, “Sea as Governmentality: East Asian Traces of the Cold War Militarization and Racialization in Early-1950s Caribbean Literature”, *The Ocean and the Seas: The University of Toronto’s Center for Comparative Literature’s 28th Annual Conference*, February 23, 2018 (University of Toronto)

2.Yutaka Yoshida, “Producing the Cold War, translating ‘anti-Americanism’: the literary in East Asia, Trinidad, and Okinawa under the U.S. military occupation.” *Global and Singular Asias: Theory and Practice*, October 16, 2017 (National Taiwan University)

3.吉田裕「人種と文化をめぐる冷戦：第１回黒人作家芸術家会議とリチャード・ライト、ジョージ・ラミング、ジェームズ・ボールドウィン」『プレザンス・アフリケーヌ』2016年度第１回研究会，2016年7月30日（東京外国語大学）

4.Yutaka Yoshida, “Translation as a Radical Assimilation and Transpacific Calling: C.L.R.James on Melville and Sadao Shinjo’s Tanka Couplet”,*The Future of the Humanities and Anthropological Difference: Beyond the Modern Regime of Translation*, July 10, 2016 (Cornell University, Ithaca, New York)

5.吉田裕，「コメント（セッション１ 移動する原爆-文学）」第 49 回原爆文学研究会「国際会議：核・原爆と表象／文学−原爆文学の彼方へ−」2015年12月12日（九州大学西新プラザ第会議室）

6.吉田裕，「困難な自律の方へ　ジョージ・ラミング中期作品試論」第 11 回日本英文学会関東支部，2015年10月31日（慶應義塾大学）

〔図書〕（計　4　件）
1.吉田裕「植民地主義と情動、そして心的な生のゆくえ――ジョージ・ラミング『私の肌の砦のなかで』と『故国喪失の喜び』における恥の位置」『ネーションと文学』庄司宏子編，作品社，2018年，ページ未定.

2.吉田裕訳，ジョージ・ラミング「黒人作家とその世界」『多様体 1』月曜社，2018年，129-143頁.

3.吉田裕訳，ジョージ・ラミング「私の肌の砦のなかで　第一章」『多様体 1』月曜社，2018年，145-55頁.

4.Lee Chonghwa.“Words for a Preface: Jindale/Azaleas or Flowers for Body Offerings.” Translated by Rebecca Jennison and Yutaka Yoshida. *Still Hear the Wound: Toward an Asia, Politics, and Art to Come*, edited by Rebecca Jennison, Brett De Bary, and Lee Chonghwa, Ithaca: Cornell East Asia Series, 2015, xliii-lvi.

６．研究組織
(1)研究代表者
吉田裕（Yoshida, Yutaka）
東京理科大学・工学部・講師
研究者番号：20734958

研究分担者、連携研究者、研究協力者は特になし。